大学体育実技に対する学生の価値観の違いについて

About a difference of student's sense of values to university physical education

多胡陽介
Yousuke TAGO

要　旨

本研究は，大学生が大学体育実技に対してどのような価値観を持っているか明らかにすることを目的とした。その結果，多くの学生がとにかく楽しく行うこと，めいっぱい運動すること，仲間と協同して行うことへの価値感を強く持っていた。また，仲間や先生から承認されること，試行錯誤しながら技術を高めること，レベルの高い技術を身に付けることへの強い価値観を持つ学生は少なかった。さらに運動に対する主観的な好意，運動能力の自己評価が高い学生は，大学体育実技に対する様々な価値観が強く，特に試行錯誤する練習を行うことや高度な技能を身に付けることへの価値観を強く持っている傾向であった。

Key Word：大学体育実技，学習意欲，価値観，欲求階層説

Ⅰ．緒言と問題の設定

体育において，受講者すなわち生徒や学生をいかに意欲的に学習活動へ参加させるかは，生涯にわたる健康や生涯スポーツの基盤を形成させていくうえで極めて重要といえる。著者の論文より，大学生の体育実技に対する意欲を高めるためには，学生の価値観に適合した授業を展開する必要がある[1)]。

学習意欲と価値観の関係として丸山は，「学習意欲は，自然発生的なものではなく，あくまでも学習というきわめて目的意識的，課題遂行的，問題探求的な活動に対する意識であり，したがって価値的内容を含んでいる」と述べている[2)]。また西田は，「達成動機付けが体育学習へ方向づけられて体育における学習意欲が生起する。達成動機付けを体育学習へ方向づける要因には，体育学習への興味などの情緒的要因，体育学習に関する価値観，必要性，目的意識などの価値的要因，運動能力の自己評価といった認知的要因，過去における成功や失敗などの経験的要因がある」と述べている[3)]。これらから体育実技に関する価値観を明確にすることは学習意欲を高めるうえで非常に重要なことであると考えられる。

ところで永田は，マズローの欲求階層説を用いることによって，スポーツ活動における欲求を７つの分類によってとらえている。運動をするうえで第１に生じる欲求は，思いきり体を動かしたいという活動欲求である。そして第２に生じる欲求としては，仕事や勉強などから離れて汗をかいてすっきりしたいなどの開放欲求である。そして第３に生じる欲求としては，みんなと協力して運動を行いたいなどの協同欲求である。さらに第４に生じる欲求としては，他の人より上手くなりたい，相手チームと競争したいなどの競争欲求である。第５には，うまくなってまわりから認められたいなどの承認欲求である。第６には，試行錯誤して運動を上手くなりたいなどの自己表現欲求である。第７には，できなかったことができるようになりたいなどの自己実現欲求である。そして，低次の欲求が満たされると高次の欲求を求めるとし，欲求の段階を知ることは活動意欲の中身を知ることにつながるとしている[4)]。そこで本研究では，大学体育実技に対する価値観を永田のマズローの欲求階層説に基づいた７つの欲求から引用して質問項目を設定し，体育実技を受講している大学生がどのような価値観を持っているか明らかにすることを目的とした。

比較の方法としては，前回の著者の論文より四年制学部と短期大学部，学科や性別の違いによって体育実技に対する意欲や価値観の傾向に差が見られ

ることから[5]，本研究においても四大・短大別，学科別，性別の視点で比較を行った。さらに体育実技に対する価値観は，学生の運動に対する好意の程度と運動能力の自己評価の程度によっても影響があるのではないかと考えたために，この２つの視点からも比較検討を行った。

Ⅱ．研究の対象と方法

１．研究の対象

１）対象の授業

聖泉大学における「スポーツ実技」「スポーツ」の実技

２）対象の授業のねらい

「学生各個人の現在持っている各スポーツの能力を基に，積極的な関心・意欲・態度で各授業内容に取り組み，試行錯誤と相互交流活動の中で思考力・判断力・応用力を養い，技能や知識・理解力を習得し，生活スポーツ化できるようになること

３）対象の学生

（１）人間学部人間心理学科第１学年受講学生：33名

（２）短期大学部企業マネジメント学科第１学年受講学生：10名

（３）短期大学部介護福祉学科第１学年受講学生：27名

２．調査日時

後期体育実技９単位時間（全15単位時間）終了直後

３．研究の内容と調査方法

（１）調査の内容

大学生の大学体育実技に対する価値観を明らかにするために，マズローの欲求階層説に基づいた以下の７つの価値観を設定した。

①めいっぱい運動すること（活動欲求）

②とにかく楽しく行うこと（開放欲求）

③いろんな人と知り合いになって親しくスポーツを行うこと（協同欲求）

④いろんな人とスポーツを通して競争すること（競争欲求）

⑤うまくできた時に誰かから誉められること（承認欲求）

⑥上手くなるために試行錯誤する練習をすること（自己表現欲求）

⑦レベルの高い技術を覚えること（自己実現欲求）

また，学生の運動に対する好意の程度と運動能力の自己評価の程度についても調査の内容に設定した。

（２）調査の方法

回答は，「大いに当てはまる」から「全く当てはまらない」までの五段階尺度法によって，各学生の主観的確率で記入をした。この他に，自由記述による体育実技に対する価値観を記載した。

また，学生の運動に対する好意の程度は四段階尺度法，運動能力の自己評価の程度については五段階尺度法によって，各学生の主観的確率で記入をした。

４．研究の手続き

（１）比較研究の視点

本研究においては，以下の５つの観点で分析し比較研究を行った。

①四年生学部と短期大学部の比較検討

②各学科の比較検討

③性別による比較検討

④学生の運動に対する好意の程度による比較検討

⑤運動能力の自己評価の程度による比較検討

（２）分析の方法

それぞれの研究の視点ごとに，調査内容の各項目ごとの平均値と標準偏差とを算出し，その結果をt－検定を用いて比較検討した。

Ⅲ．研究の結果と考察

1．四年生学部と短期大学部の比較検討

四年生学部と短期大学部の平均値を示したのが，図１である。また，表１は四年生学部と短期大学部の各質問項目の平均値と標準偏差及びｔ－検定結果を表したものである。

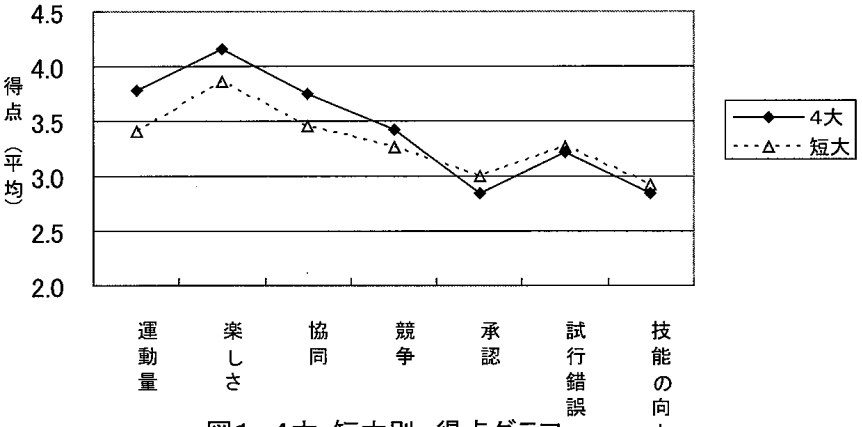

図1　4大・短大別　得点グラフ

表１より４年制学部と短期大学部に有意な差は見られなかった。全体的な傾向としては，多くの学生がとにかく楽しく行いたいという価値感を持っている。また各順位を見てみると，めいっぱい運動できることや仲間と協同して行うことが上位の順位である。このことから多くの学生は，運動量があり仲間と協同し，楽しく行えることの３つの価値観を持っている。

表１　四年生学部と短期大学部の各項目平均値と標準偏差

	4大（n=33）		短大（n=37）	
	平均（順位）	標準偏差	平均（順位）	標準偏差
運動量	3.8（2）	1.08	3.4（3）	1.21
楽しさ	4.2（1）	1.00	3.9（1）	1.18
協同	3.8（2）	1.12	3.5（2）	1.22
競争	3.4（4）	1.00	3.3（4）	1.17
承認	2.8（6）	1.15	3.0（6）	1.08
試行錯誤	3.2（5）	1.19	3.3（5）	1.10
技能の向上	2.8（6）	1.06	2.9（7）	1.14

＊Ｐ＜0.05

順位が低い項目としては，４大・短大とも仲間や先生から承認されること，試行錯誤しながら技術を高めること，レベルの高い技術を覚えることである。

これらから体育実技では，レクリエーション感覚の楽しい練習や仲間とのコミュニケーションを基本とした内容を行うことにより，学生の意欲を効果的に高められると考えられる。そして，学生の意欲の高まり状況を見て，試行錯誤を重視した練習やレベルの高い技術練習に移行すると良いと考えられる。

多くの学生は，とにかく楽しく行えることを重視する価値観を持っている。しかし，楽しいという概念の中には様々な楽しさの要因があると考えられる。今後は，どのような楽しさを学生は求めているかについて検討する必要がある。

２．各学科の比較検討

図２は，各学科ごとの質問項目の平均値を表したものである。また，表２は，各学科ごとの各質問項目の平均値と標準偏差を表している。さらに表３は各学科ごとの検定結果を表している。

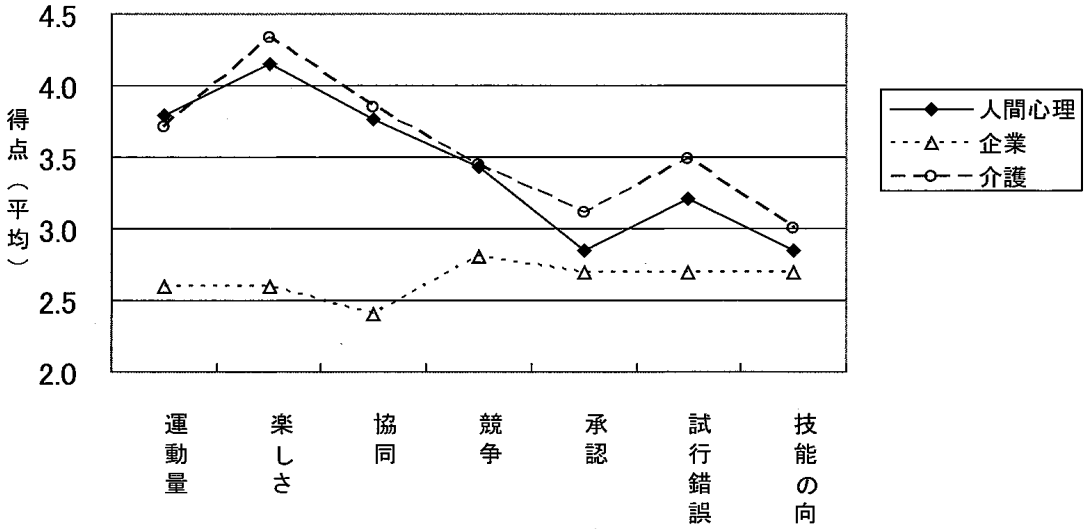

図2　学科別　得点グラフ

表２及び表３より，人間心理学科・介護福祉学科と企業マネジメント学科との比較では，めいっぱい運動すること，とにかく楽しく行えること，仲間と協同して行えることの３つの項目で人間心理学科と介護福祉学科の方が企業マネジメント学科より有意に値が高かった。また全項目において企業マネ

ジメント学科の値は，人間心理学科・介護福祉学科より低い傾向にあった。このことから，企業マネジメント学科の学生は，体育実技に対して他の学科と全く違う価値観を持っていると考えられる。例えば，単位を楽に取得できることなどが考えられるが，自由記述欄には記載されていなかったので本研究では明らかにすることができない。

人間心理学科と介護福祉学科との比較では，有意な差はみられなかった。各項目の順位を見ると，介護福祉学科の方が試行錯誤して練習を行うことへの価値観が高かった。これらから学科の違いによって学生の持つ価値観がわずかに異なってくることがわかった。

表２　各学科別の各項目平均値と標準偏差

	人間（n=33）		企業（n=10）		介護（n=27）	
	平均（順位）	標準偏差	平均（順位）	標準偏差	平均（順位）	標準偏差
運動量	3.8（2）	1.08	2.6（5）	1.26	3.7（3）	1.07
楽しさ	4.2（1）	1.00	2.6（5）	0.84	4.3（1）	0.92
協同	3.8（2）	1.12	2.4（6）	0.97	3.9（2）	1.06
競争	3.4（4）	1.00	2.8（1）	1.23	3.4（5）	1.12
承認	2.8（6）	1.15	2.7（2）	1.06	3.1（6）	1.09
試行錯誤	3.2（5）	1.19	2.7（2）	1.25	3.5（4）	0.98
技能の向上	2.8（6）	1.06	2.7（2）	1.34	3.0（7）	1.07

表３　各学科別の検定結果　（数字は危険率を示す）

	人間：企業	企業：介護	人間：介護
運動量	0.006＊＊	0.012＊	0.76
楽しさ	0.0001＊＊＊	0.00001＊＊＊	0.47
協同	0.0013＊＊	0.0006＊＊＊	0.74
競争	0.11	0.14	0.94
承認	0.72	0.31	0.37
試行錯誤	0.25	0.05	0.35
技能の向上	0.72	0.48	0.59

＊＊＊P＜0.001　＊＊P＜0.01　＊P＜0.05

表４　性別の各項目平均値と標準偏差

	男性（n=30）		女性（n=40）	
	平均（順位）	標準偏差	平均（順位）	標準偏差
運動量	3.6（2）	1.22	3.6（2）	1.10
楽しさ	4.0（1）	1.06	4.1（1）	1.17
協同	3.6（2）	1.20	3.6（2）	1.16
競争	3.5（4）	1.04	3.2（5）	1.16
承認	3.0（6）	1.09	2.8（6）	1.15
試行錯誤	3.2（5）	1.00	3.4（4）	1.30
技能の向上	3.0（6）	1.17	2.7（7）	0.99

＊Ｐ＜0.05

３．性別による比較検討

図３は，性別による平均値を表したものである。また，表４は，性別による各質問項目の平均値と標準偏差を表している。

表４より男性と女性において有意な差は見られなかった。各項目の順位を見てみると，とにかく楽しく行えること，めいっぱい運動できること，仲間と協同して行えること，先生や仲間から承認されることについての４項目は，男女とも同順位である。しかし，仲間と競争できること，レベルの高い技術を覚えることの２項目は，女性より男性の順位が高い。また，試行錯誤しながら練習することについては，男性より女性の順位が高い。このことから性別による価値観の相違点としては，男性では仲間と競争できること，女性では試行錯誤しながら能力を向上させることを重視する傾向があると考えられる。

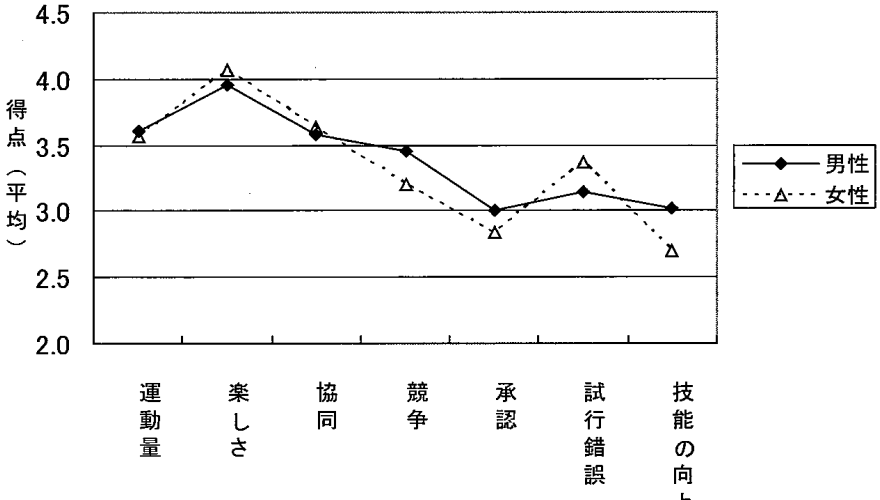

図3　性別　得点グラフ

4．学生の運動に対する好意の程度による比較検討

図４は，学生の運動に対する主観的な好意の程度別による質問項目の平均値を表したものである。また，表５は，学生の運動に対する好意の程度別による各質問項目の平均値と標準偏差を表している。さらに表６は検定結果を表している。

表５及び表６より，運動することがとても好きと答えた学生は，試行錯誤して練習を行うことと高度な技能を覚えることの２項目において，まあまあ好きと答えた学生より有意に値が高かった。また，運動することがとても好きと答えた学生は，高度な技能を覚えることの１項目において，あまり好きではないと答えた学生より有意に値が高かった。さらに全項目において，運動することがとても好きと答えた学生は，まあまあ好き・あまり好きではないという学生と比べて値が高い傾向にあった。これらから運動することがとても好きな学生は，運動することへの好意の程度が低い学生と比較して，試行錯誤しながら練習することやレベルの高い技術に挑戦することへの価値観が強いことがわかった。なお，運動が好きではないと答えた学生はいなかった。

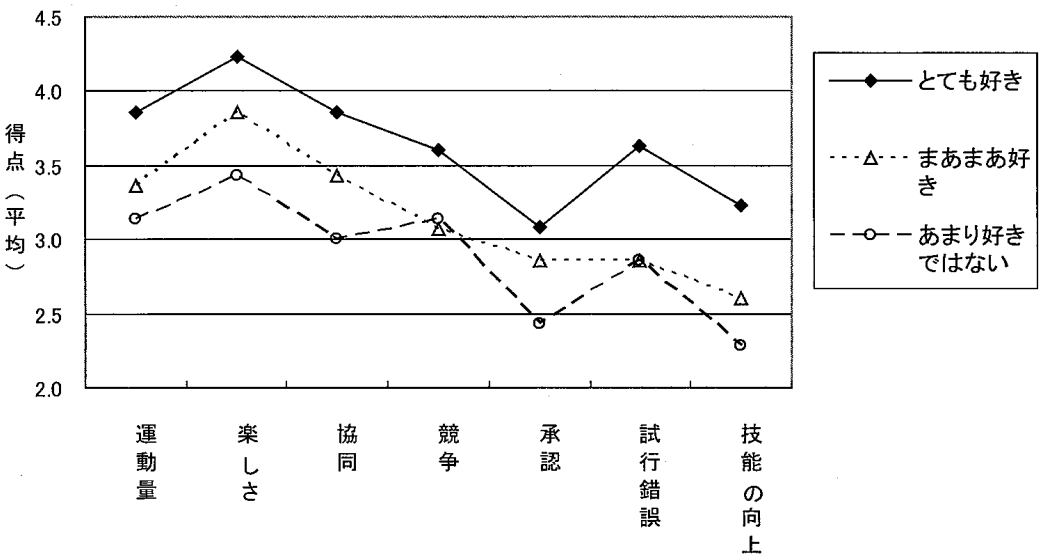

図4　運動の好き嫌いの程度別　得点グラフ

表５　運動への好意の程度別による各項目平均値と標準偏差

	とても好き (n=35)		まあまあ好き (n=２８)		あまり好きではない (n=７)		好きではない (n=０)	
	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差	平均 (順位)	標準偏差
運動量	3.9（2）	1.15	3.4（2）	1.11	3.1（2）	0.99	0	0
楽しさ	4.2（1）	0.99	3.9（1）	1.19	3.4（1）	0.90	0	0
協同	3.9（2）	1.10	3.4（2）	1.21	3.0（4）	0.93	0	0
競争	3.6（4）	0.99	3.1（5）	1.13	3.1（2）	0.99	0	0
承認	3.1（7）	1.08	2.9（6）	1.12	2.4（6）	0.90	0	0
試行錯誤	3.6（4）	0.90	2.9（6）	1.12	2.9（5）	1.46	0	0
技能の向上	3.2（6）	1.02	2.6（7）	1.08	2.3（7）	0.88	0	0

表６ 運動の好意の程度別による検定結果　（数字は危険率を示す）

	とても好き：まあまあ好き	まあまあ好き：あまり好きではない	とても好き：あまり好きではない
運動量	0.09	0.65	0.14
楽しさ	0.19	0.39	0.06
協同	0.15	0.40	0.07
競争	0.06	0.88	0.28
承認	0.42	0.37	0.15
試行錯誤	0.004＊＊	1.00	0.08
技能の向上	0.02＊	0.48	0.03＊

＊＊＊Ｐ＜0.001　＊＊Ｐ＜0.01　＊Ｐ＜0.05

５．運動能力の自己評価の程度による比較検討

図５は，学生の運動に対する主観的な運動能力の自己評価の程度別による質問項目の平均値を表したものである。また，表７は，学生の運動に対する運動能力の自己評価の程度別による各質問項目の平均値と標準偏差を表している。さらに表８は検定結果を表している。

表７及び表８より，運動することがとても得意と答えた学生は，めいっぱい運動することの１項目において，まあまあ得意・全く得意でないと答えた学生より有意に値が高かった。またとても得意・まあまあ得意・どちらともいえないと答えた学生は，高度な技術を習得することの項目について，あま

り得意でないと答えた学生より有意に値が高かった。このことから運動することが得意だと思っている学生は，運動が得意だとあまり思っていない学生より，めいっぱい運動できることや高度な技術への習得についての価値観を強く持っていることがわかった。

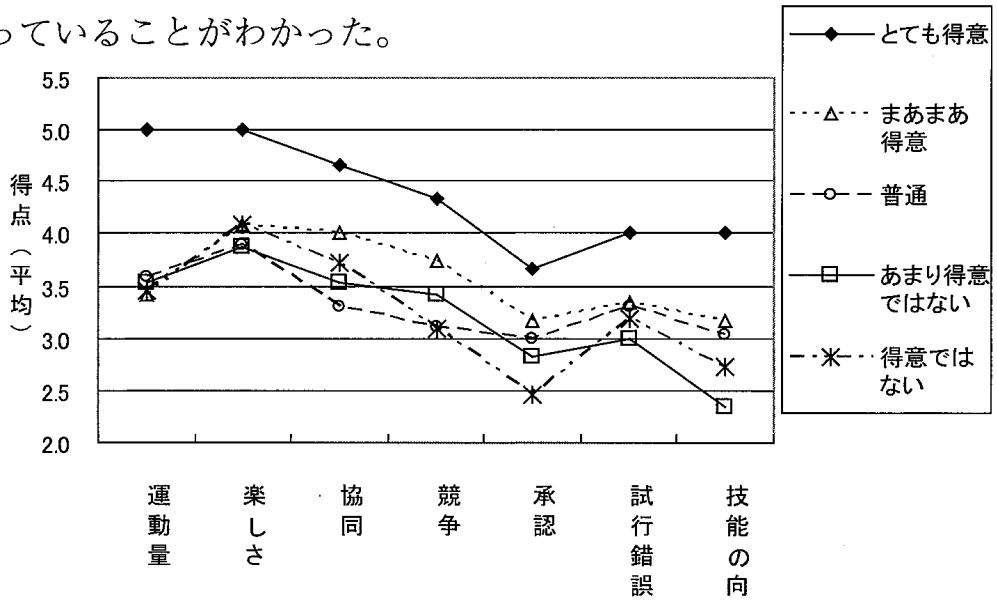

図5　運動能力の程度別　得点グラフ

表７ 運動能力の自己評価の程度による各項目平均値と標準偏差

	とても得意 (n=３)		まあまあ得意 (n=12)		普通 (n=27)		あまり得意ではない (n=17)		得意ではない (n=11)	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
運動量	5.0	0	3.4	0.86	3.6	1.28	3.5	1.19	3.5	0.89
楽しさ	5.0	0	4.1	0.76	3.9	1.23	3.9	1.18	4.1	0.90
協同	4.7	0.47	4.0	0.71	3.3	1.30	3.5	1.29	3.7	0.75
競争	4.3	0.47	3.8	0.43	3.1	1.20	3.4	1.14	3.1	1.00
承認	3.7	0.94	3.2	0.69	3.0	1.22	2.8	1.04	2.5	1.08
試行錯誤	4.0	0.82	3.3	0.75	3.3	1.08	3.0	1.19	3.2	1.40
技能の向上	4.0	0.82	3.2	0.80	3.0	1.17	2.4	0.84	2.7	1.14

表８ 運動能力の自己評価の程度による検定結果（数字は危険率を示す）

	運動量	技能の向上
とても得意：まあまあ得意	0.011＊	
とても得意：あまり得意ではない		0.007＊＊
とても得意：全く得意ではない	0.017＊	
まあまあ得意：あまり得意ではない		0.02＊
どちらともいえない：あまり得意ではない		0.046＊

＊＊＊Ｐ＜0.001　＊＊Ｐ＜0.01　＊Ｐ＜0.05

Ⅳ．研究の要約と総括

本研究は，大学生が大学体育実技に対してどのような価値観を持っているか明らかにすることを目的とした。その結果，四年生学部と短期大学部の比較検討においては，四年制学部と短期大学部に有意な差は見られなかった。全体的な傾向としては，多くの学生がとにかく楽しく行いたいという価値感を持っていた。また，仲間や先生から承認されること，試行錯誤しながら技術を高めること，レベルの高い技術を身に付けることへの強い価値観を持つ学生は少なかった。

学科別による比較検討においては，各学科により若干の価値観の違いが見られた。特に企業マネジメント学科では，他の学科より全体的に価値観が低い傾向にあり，めいっぱい運動すること，とにかく楽しく行えること，仲間と協同して行えることの３つの項目で他の学科より有意に値が低かった。

性別による比較検討においては，男性と女性において有意な差は見られなかった。価値観の相違点としては，男性では仲間と競争できること，女性では試行錯誤しながら能力を向上させることを重視する傾向があると考えられた。

学生の運動に対する好意の程度による比較検討においては，学生の主観的な運動に対する好意の程度によって，学生の持つ価値観に相違があることがわかった。特に運動することがとても好きな学生は，運動することへの好意の程度が低い学生と比較して，試行錯誤しながら練習することやレベルの高い技術に挑戦することへの価値観が強いことがわかった。

運動能力の自己評価の程度による比較検討においては，学生の運動に対する主観的な運動能力の自己評価の程度より，学生の持っている価値観に相違があることがわかった。運動することが得意だと思っている学生は，運動が得意だとあまり思っていない学生より，めいっぱい運動できることや高度な技術への習得についての価値観を強く持っていることがわかった。

これらを総括して，大学生の体育実技に対する価値観は，全体として多くの学生がとにかく楽しく行いたい，めいっぱい運動したい，仲間と協力しな

がら行いたいという価値感を共通して持っていた。また，仲間や先生から承認されること，試行錯誤しながら技術を高めること，レベルの高い技術を身に付けることへの強い価値観を持つ学生は少なかった。これらから体育実技では，レクリエーション感覚の練習や仲間とのコミュニケーションを基本にした内容を行うことが学生の価値観に適合すると考えられ，ひいては学生の意欲を効果的に高められると考えられる。そして，学生の意欲の高まり状況を見て，試行錯誤を重視した練習やレベルの高い技術練習に移行すると良いと考えられる。また，運動への好意の程度や運動能力の自己評価によって価値観が異なることから，運動が得意な学生や楽しそうに行っている学生には，試行錯誤して練習を行うことや高度な技術へ挑戦することを促すことが重要であると考えられる。今後は，学生における体育実技の価値感について受講前と受講後では，価値感に変化が表われるのか検討していきたい。

【引用・参考文献】

1）多胡陽介他　聖泉論叢第12号　pp61-74 聖泉大学学会　2005
2）丸山真司　体育学習を育てる体育の授業づくり　体育科教育　41-5 pp18-22　1993
3）西田保　体育における学習意欲の喚起に関する研究　pp 2 -39 杏林書院　2004
4）永田靖章　スポーツ集団のマネジメントpp52-105　ぎょうせい　1998
5）多胡陽介他　聖泉論叢第11号　pp39-59 聖泉大学学会　2004